

【代表が交代しました】3月21日にオンラインで開催された会員総会において、代表交代を含む役員の変更が行われました。新旧代表からのご挨拶を掲載します。

どこまでも柔軟に ～代表就任のご挨拶～

新代表 高津佳史

新しく代表に就任した高津です。コロナ一色の毎日ですが皆さまいかがお過ごしでしょうか。サヘルの森の設立は1987年ですから、今年で34年目になります。その間、マリでは民族紛争やクーデターの勃発、日本では阪神・東北の震災、近年の台風や大雨の被害と、コロナに限らず様々な騒乱や災害が発生してきました。

ご存じのように当会の設立のきっかけとなったのは、1980年代前半に発生したサヘル地域の干ばつです。エチオピアなどに比べて、国内での認知度が低かった西アフリカにも支援の手をとということで、マリ共和国での活動に着手することになりました。

震災を機にボランティアやNPOが広まったように、今回のコロナ騒動でもテレワークや働き方改革が浸透し始めています。モバイル機器や通信網の急速な発達、マリの砂漠で暮らす人ともスマートフォンでのやり取りを可能にしました。現在進行中の首都バマコ近郊での活動も、こうしたリモートワーク形式で進められています。マリ人スタッフが地域苗畑を巡回して、活動状況を報告してもらいます。苗木を配った学校や苗木職人の話は、スタッフ経由で日本に届き、こちらからはアドバイスを送っています。

環境変化に合わせて住まいや暮らし方も変えて行く、これはサヘル地域の住民が得意とする生活様式です。どこまでも柔軟な彼らに倣って、私たちの活動も柔らかく且つしぶとく続けて行ければと考えています。

+++++新代表・高津のプロフィール+++++

青年海外協力隊でマリの隣国ニジェールに派遣されていたのがきっかけで、サヘルの森と関わるようになりました。マリには2000年に短期派遣で行ったのが最後になります。仕事で鳥の調査をしている関係で、鳥の巣を収集しています。地元の千葉県我孫子市で開催されるジャパン・バードフェスティバルには欠かさず参加して、サヘルの活動や鳥の巣の展示を行っています。

これまでとこれから ～退任のごあいさつ～

前代表 坂場光雄

多くの皆様からたいへん長期にわたってご支援をいただいで感謝をしております。運営を担っている皆様もありがとうございます。

1999年11月、それまでの任意団体サヘルの会から、東京都認定の特定非営利活動法人サヘルの森が設立されました。その時に代表に就任いたしました。

マリの現地活動は一時中断もありましたが、2004年からは日本人の派遣、活動が再開されました。その後は毎年、現地活動への派遣が固定化されました。2012～2013年はマリの治安悪化のために日本人のマリ派遣ができませんでしたが、2014年から治安が不安定の中、派遣を再開しています。活動が安定してきたとおもったら、2020年からはコロナ禍になりました。2021年3月の総会で代表を退任しました。

2003年、活動の資金不足から、事務局窓口は町田の会社の一角に移し、事務局員はおかず、それぞれの活動は作業を分担して行うことになりました。忙しい中、皆様のご協力が進めることができました。

作業を分担する方式の運営によって、費用の節約が出来た半面、人々との交流、意見交換が少なくなり、新たな人材不足、考え方の固定化が進んでいるように思います。折に触れて様々なキャンペーン活動の減少や現地活動のテーマも同じようになり、アピールの機会が少なくなったような気がします。ただ、新たな協力スタッフにより、これまで抜けていた外部に向けての広報、活動紹介もされるようになりました。

温暖化による気候変動の振幅が大きくなって、マリではさらなる農業生産減少、砂漠化の拡大が懸念されています。新代表を迎え、新たな体制での活動ですが、引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。

+++++坂場さんお疲れさまでした（新代表→前代表へ）+++++

1999年から2021年までの代表就任期間の中で、坂場さんは毎年決まって5月中旬から7月中旬までの2か月間、マリに滞在して苗木の育成や配布活動に携わってこられました。家族も仕事もある中で毎年2か月のアフリカ出張、通算40数か月のマリ滞在というのはどんな生活だったのでしょうか。。私が退任の理由を聞いたとき、「長すぎるよ」とだけ答えてくれました。私が初めて坂場さんと会ったのは1990年のティンナイシャ村でした。ファギビンヌ湖の旧湖底にあった植林地で、毎日ひたすら木を植える姿を思い出します。そこから30年以上もマリで木を植え続けてきた坂場さん。本当に長い間お疲れさまでした。

（高津佳史）

1年半ほど日本人が派遣できていない状況でも、マリ人スタッフを中心にサヘルの森の活動は進められています。今回は、これまで機関誌などに登場していない実践者を中心に、トラオレさんの報告の端々に見え隠れする、彼らの生活や背景などを交えて活動をお伝えします。

入植者はつらいよ

マナコロ村のシャカ・トラオレさんは、元農業局の役人で、畑を牛犁で耕すときのためにウシを調教する専門家でした。ちょうどマナコロ村に隣接して広大な農業局の農場があり、彼はその官舎に住んでいました。退職後、この土地を気に入ったシャカさんはマナコロ村の村長にかけ合い、入植を決めました。

入植の時にあてがわれた土地は、村より少し上がった丘の上で、村に比べ井戸も深く、土地も痩せていました。もう少し良い土地をと村に頼み込んでいるようですが、なかなか首を縦に振ってくれません。仕方なく、近くの灌木林から肥沃そうな土をロバ車で運び、畑に客土するなど工夫しています。



畑の境界に植えたユーカリ

もともと農業局時代に農業技術に触れていたこともあり、サヘルの森の研修前にすでにズィズィフィス改良種の接ぎ木をして育てており、里山再生を実践していく素地はもともとありました。やせた土地に寄り添うように、コツコツと木を育て、里山再生を実践しています。

飼料を生む在来種を育てる

ジェバ村のマドゥ・マリコさんは、同じ実践者のユースフ・マリコさんと共に村の学校運営委員会の一員です。村にある小学校が順調に運営できるよう、教師の給与を村人から徴収したり、校舎の補修、校庭の除草などの活動を行ったりしています。数年前にはサヘルの森が苗木を支援し、学校林の育成も行いました。

そんな彼は、研修後に自身の畑に井戸を掘り、苗畑を開設して、果樹や樹木を育成しています。昨年も少しずつ植林地を増やして、ユーカリなどの樹木を植えています。

トラオレさんによる彼の畑の写真を見ると見慣れない木が植えて育てられていました。報告によるとバンバラ語で「トロ」と呼ばれる在来種の樹木でした。写真が不鮮明で何の仲間の木か判別できませんが、葉は市場で高値で取引される、最上級の飼料になるのだということです。前号の『マリ生活点描』の写真にあるように、里山から切り出されて都市に運ばれる飼料です。



畑に植えられた在来種・トロ

近年、この地域でもこの木が少なくなっているようで、マドウさん本人が野に生えていた幼木を採って畑に植えました。他にも違う種類の在来種を育てたいと実践者から聞くようになってきており、消えゆく在来種を取り戻す方向性もでてきたことをうれしく思っています。

近郊農業の地で木を育てる

ウェラクラ村は、近年発展の目覚ましい地方都市コソブグーから7kmほど入った、比較的アクセスのしやすい村です。多くの村人が井戸からポンプで水を汲みだしてトマトやタマネギなどの野菜を栽培するので量が確保できると、バマコなどの都市から直接商人が買い付けに来る近郊農業の村でもあります。

実践者のマミ・クリバリさんは、以前から複数のNGOとの関わりで育苗技術などを学び、野菜栽培のほかにズィズィフィス改良種などの果樹も栽培しています。特筆すべきは、アカシア・セネガルやアカシア・アルビダなどのマメ科の在来樹種の木の育成。アカシア・セネガルは樹脂がアラビアゴムになり、アカシア・アルビダは雨期に葉を落とすので穀物栽培と競合せず、実は家畜の精力剤となります。生長が遅いので、林としては目立ちませんが、彼の活動は里山再生の先駆的な存在です。



大きく生長したアカシア・アルビダ

実践者の影武者

前号の機関誌で、ファナの建築補助材としての需要から、ユーカリを植え出したカソマブグーのイーサ・ジャラさんの話を書きました。育苗もうまくできなかった彼が急に大量の苗を育て植えることのできた裏に影武者の存在がありました。兄のブレイマ・ジャラさんです。

ブレイマさんはコソコソと真面目にやるタイプで、昨年、イーサさんの苗畑で2,000本の苗木を育て、イーサさんの畑に1,000本近くのユーカリを植えたのは彼でした。今年も自分の土地に木を植えるべく、既に自身の苗畑を作って育苗を始めました。スタッフのトラオレさんのアドバイスもあって、雨期直前の乾期に穴を掘って植え始めています。

隠れた篤農家を探せ

ブレイマさんのように、実践者としての研修に漏れたけれど、木を植えることが好きで、地道にコソコソと仕事を進める篤農家はまだまだたくさんいます。また、カソマブグー村では実践者から育苗して余った苗木を無料でもらった近隣の村人がいたり、ジェバ村では実践者の苗畑から、自分も植えたいと果樹の苗木を購入していった村人もいました。

今年からはそうした人たちにアプローチをして共に育苗し、苗木を里山に植え、育て、利用する新規実践者を増やしていくことを始めています。新規実践者のもとには今まで数年経験を積んだ既存の実践者も同行してもらい、共に作業をしながら、自らの経験と技術を新規実践者に伝えてもらいます。

また、研修時に講師になってもらった地域苗畑や先んじた実践者の里山にも訪れ、その経験や失敗談などを交流することで、新規実践者がその先の活動をイメージできるような、里山再生のための緩やかな人的ネットワークを作りたいと考えています。

おもしろ在来種 ～第4弾～ チューインガムの木 (*Cordia myxa*.)



先年6月の半ばにファナ地域のダギ村を訪問、苗木配布を行った。この村は何度も来ており、10年ほど前に来た時に配布したイピル、モリンガ、バオバブなどが大きく生育している。

この村は家群が分散しており、途中の畑に樹木が多くて全体が把握しにくい。今回はいつもの道路ではなく、奥の方の道路から回り込んで配布を始めた。この時期、ようやく雨が降り始め、畑のうねの間に雑草が生え始めている。一部では耕起が始まっているが、まだ種まきは行われていない。



10年前に配布したイピル（左）とバオバブ（右）

畑の中に樹高5～6mの広葉樹があり、実を付けていた。うすいオレンジ色の直径2cmほどの丸い実である。この実はずいぶん前に別の村でいただいて食べたことがあった。名前を聞いたが、忘れてしまっていた。でもこの実の食感が面白く印象に残っていた。口に含んでかむと、ほんのり甘く、チューインガムのようにネチャネチャする。中には小さな種がある。



デュケの実（左）とデュケの葉と実（右）

名前を聞くと、バンバラ語ではデュケというそうだ。図鑑(Trees and shrubs of the Sahel)で調べると、図や解説は載っていなかったが、バンバラ語と学名の一覧があり、そこにデュケの記載があった。学名は *Cordia myxa*、ムラサキ科の植物で、和名はカキバチシャノキである。葉はやや大きく葉脈のはっきりしている。日本の南部に分布するマルバチシャノキ (*Ehretia dicksonii*) に近い仲間のようなのである。村人は果実をおやつ感覚で食べていた。日本ではチシャノキの仲間の若葉は食用になるようであるが、マリでデュケの若葉を利用しているかどうかは不明である。（坂場光雄）

サハラ砂漠の魅力が詰まった書籍を
原梓さんにご紹介いただきました

◆「サハラ砂漠塩の道をゆく」◆

(片平孝、集英社新書ヴィジュアル版、2017年)

サハラ砂漠のタウデニ鉱山から岩塩を運ぶラクダのキャラバン「アザライ」に写真家である著者の片平氏が2003年に42日間かけて同行したお話です。

出発地はサヘルの初期のプロジェクトを行っていたトンブクトゥ。トンブクトゥはかつて塩の交易の拠点でした。このトンブクトゥの街からタウデニまで往復で1500キロの命がけの旅の記録です。鉱山で働く人たちの様子や背景も書かれています。この旅で通訳兼コックとして雇われたトゥアレグ族の男性は、サヘル関係者でした。サヘル日本人スタッフが教えたと思われる「ラクダは楽だ」というダジャレも披露していました。教えたのは誰でしょう？

砂漠の遊牧民の暮らしを「貧しい・大変」とだけ捉えるのではなく「実は自然の恵みをうまく利用したグルメな暮らし」「遊牧民は大自然と共存して生きる素晴らしい知恵を身につけている」と書かれていることも嬉しく感じました。日中の暑さ、夜の寒さ、疲れ、のどの渇き、空腹…砂漠の旅の過酷さは容易に想像できます。

しかし、砂漠は美しい。この本の写真が本当に美しいです。「静まり返った砂漠は、哲学の海、迷いの海、観念の海。その先に夢にまで見たタウデニがある。」という景色を想像すると、厳かな気分になります。

現在はテロ組織の拠点となってしまっているサハラ砂漠。平和が戻ることを祈ります。
(原梓)

◇数値で見るマリ (2021.6) ◇

首都バマコの今年6月の気温: 24~39度、
ファナより北のセグーでは: 25~43度
降雨量: 数ミリ (3~7ミリ) 乾期で暑い
マリ国内の新型コロナ感染者: 6月は最大で20人/日程度、感染のピークは4月
コロナワクチン接種率: 0.66%

3月21日に会員総会がオンライン形式で開催されました。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、事前に送付した総会資料による書面評決となりました。計147名の会員から書面評決書の返送があり、賛成多数で活動計画案が承認されました。昨年に続き手間のかかる書面評決となりましたが、ご協力いただきました皆様には深く感謝申し上げます。

皆様から送られた書面評決書の意見・質問欄から主なものをご紹介します。下記以外にも「ファナ特集号はカラーで植林成果が分かりやすかった」、「イオン環境財団からの助成に漏れて残念だ」とのご意見がありました。

○現地の気候に合った果樹苗の導入は？

⇒果樹苗も導入しています。カシューナッツやグアバなどの他に、在来のズィズィフィスの改良種やスンスンというアフリカガキ(柿)の苗も配っています。

○事務用品費の増加理由は？

⇒パソコンを更新しました。ホームページ作成など主に広報用に使用します。

○新役員のプロフィールを紹介してほしい

⇒新代表の経歴を今号に掲載しました。

マリ生活点描



街中で見かけたパンの運び屋さん。バイクの荷台に木枠を乗せて、6~70本ほどのフランスパンを縦に入れている。パン屋から小売店までこの状態で運んで行く。1本50円ほど。衛生的には微妙だが、皮がパリッとしておいしい。

牛乳パックの回収活動

サヘルの森では、森林資源のリサイクルという観点から、牛乳パックの回収活動を続けています。今ではどこのスーパーにも回収ボックスが見られるようになりましたが、開始当初は町内会、学校、自治体などで集めた牛乳パックも運搬手段がないため、サヘルスタッフが直接回収して古紙回収業者の山田洋治商店さんまで届けていました。

浦島丘中学校

4/13 に横浜市立浦島丘中学校で資源回収委託式が行われ1年ぶりに出席してきました。

昨年は新型コロナウイルスの感染拡大により緊急事態宣言が出され、委託式自体が中止になりました。

今年は、例年のように全校生徒が体育館に集まっての全校集会で行うのではなく、全校テレビ放送で委託式を行いました。

生徒会の皆さんにより、サヘルの森と浦島丘中学校の32年間にわたる関係やサヘルの森の活動紹介された後、昨年度の資源回収結果の発表がありました。コロナ禍で活動が制約される中、一生懸命集めた1年間の牛乳パックとアルミ缶の回収金8,160円が会の活動資金として委託されました。

例年のように写真を使っての活動紹介はできませんでしたが、カメラを通じて、マリの現状や現地活動の様子などをお話してきました。歴史ある浦島中の資源回収とサヘルの森の活動がうまくつながればという想いを新たにしました。

今年は写真を使ってお話しできなかったもので、写真を何枚かパネルにして生徒会の皆さんに手渡してきました。これからの1年もよろしくお願いします。(榎本肇)

小岩第一中学校

6/17 に江戸川区立小岩第一中学校に伺い、牛乳パックの回収を行いました。「学校版もったいない運動」ということで、生徒会の皆さんが中心となって牛乳パックのリサイクル活動に取り組んでおられます。回収した150キロの牛乳パックは、山田洋治商店さん

に2,310円で買い取っていただき、会の活動資金として頂戴しました。

同校とは20年来のお付き合いで、2008年にはマリ中部のゴッシに滞在していた上田さんを通じて、記念植樹を行ったこともありました。その後どうなったのか？ちゃんと育っているのか？現地の様子を伝えてあげられないのが、もどかしいです。(高津佳史)



生徒会の皆さんと積み込み(小岩第一中学校)

マリ生活点描



道端で少年が売っていた白い液体。パンノキの水というものらしい。樹液を発酵させた飲み物で、甘くてさわやか、サイダーのような味がする。パンノキとはどんな木なのだろうか？樹液を採取しているところを見に行きたいものだ。

国内活動(1月～5月)

<定例活動>

会員交流や植物観察などを目的に毎月第3土曜日を中心に開催を予定していましたが、新型コロナウイルスの感染拡大と東京都における緊急事態宣言の発出により、残念ながら全て中止となりました。

- ・1/16 雑司ヶ谷七福神
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・2/20 辰巳の森海浜公園と洲崎神社
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・3/20 野沢稲荷と世田谷公園
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・4/17 滝山城跡と少林寺
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止
- ・5/15 亀戸水神、大正民家園と荒川堤防
*新型コロナウイルス感染拡大の為中止

ブログのご案内

今年は日本人スタッフの派遣ができませんでしたが、現地スタッフのトラオレから送られてくるレポートなども写真付きで掲載しています。

その他、坂場前代表の植物お散歩コラム(ぶらさかば)など掲載しています。おすすめのお散歩コースも写真付きで解説しています。自粛続きの体力低下を避けるためにも、ぶらぶら散歩にご活用下さい。

サヘルノ森スタッフブログ
<https://sahelnomor.exblog.jp/>

七夕募金のお願い

コロナ禍の終息と平穏な日常の再開を願って、七夕募金へのご協力をお願いします。

マリでは昨年、クーデターが発生したばかりですが、5月には2度目のクーデターが勃発するなど、未だに不安定な政情が続いています。マリ北部ではイスラム原理主義を掲げる反政府勢力との対立も収まる気配がありません。こうした政情不安と新型コロナウイルスの影響もあって、日本人スタッフの派遣予定も見通せない状況にあります。

厳しい現状にはありますが、現地スタッフ

とはリモート形式でやり取りするなど工夫を重ねながら苗木配布や里山再生実践の事業を継続しています。サヘル地域の里山再生を進めるため、多くの皆様からご協力をいただければ幸いです。

お振込みの際は同封の振込用紙をご利用下さい。

苗木募金で里山再生

苗木募金は一口 500 円から受け付けています。500 円で、アフリカでは 2 本の苗木を村人に届けることができます(スタッフの派遣費用も含める)。

募金の際は「苗木募金」と明記下さい。

振込用紙ご記入時のお願い

会費やご寄付でお振込み頂く際、振込用紙に領収書の要・不要を必ずご記入ください。

尚、サヘルノ森は寄付等による所得控除の対象になりません。

ご協力のほど、よろしく申し上げます。

会費納入にご協力ください

NPO 法人『サヘルノ森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000 円
- ・維持会員 年 20,000 円

特定非営利活動法人 サヘルノ森

住所：〒194-0013
東京都町田市原町田 1-2-3-403
TEL：042-721-1601 (留守電対応)
FAX：042-721-1704
郵便振替口座：00170-6-115054

HP：http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/
BLOG：http://sahelnomor.exblog.jp/
E-mail：sahel-no-mori@jca.apc.org

機関誌『サヘル』No.108 2021年6月30日発行
発行人／編集：高津佳史
